

薜菊披過人影
 嵐虛存石頭
 秋色江南
 如此幾時歸去
 湖州

題畫詩
 己未年冬 前書于海上 去 駐隨緣堂 吳昌碩年七十六



大妻女子大学博物館 特別展

吳昌碩と 日本人士

— 中国最後の文人と交流した
 書画文墨趣味ネットワークの人々 —

昔尺字數首 潤後老梅 曉我
 一枝 昔山中 真安内 清色 潤
 羅漢 是 於 吾 石 皆 其 形 也



松雨洗煙情
 山深人亦東
 花淡春未
 留 亦 苦
 庚申年五月
 吳昌碩

春道人重此詩文潤格
 絕句天光 律詩 謝虎 吳昌碩
 古風 八元
 畫聯 二五
 明前 吳昌碩
 登子 於 天 元 碑 誌 難 文 吳 錄
 華 年 實 先 卷 訂 日 辰 仲
 道 說 卷 上 每 年 集 吳 社
 庚申三月 吳昌碩時年七十六

主催 大妻女子大学博物館

28 竹石図

山田家山 紙一三三×横三三三

明治四年(一九〇八)頃 松村茂樹氏

山田家山(一八五六—一九一八)、名は清子、寒山は号。尾張名古屋の人。篆刻家。詩書畫篆刻のみならず、俳諧、陶芸、製菓、経緯にまですぐれた。一九一九年二月、蘇州にいた呉昌碩を訪ね、篆刻封題を尋ねられている。この作は竹石の間に自号の詩題「白鳥集」を揮毫したもの。「胸中唯有竹、眼界自無雙。隨道寒山路、清風日又新。胸中にはたなごのみあり、視野に自ずと俗世は映らない。至る所寒としたなごの山の道は、清らかな風が吹き日々新鮮な変化がある。」(青山、山田清)。

29 与山田聖華房尺牘

富岡鉄斎 紙八九×横一五三 他

明治・大正時代 松村茂樹氏

富岡鉄斎(一八一七—一九一四)、名は百穂、武郡の人。画家。大正六(一九一七)、鉄斎は息子の義子・海舟の呉昌碩を問うさせ、印二種の制作を依頼した。この時、長尾雨山は呉昌碩に朱文印刷作を依頼し、印を鉄斎に贈った。また大正二年、鉄斎は呉昌碩に、自身の邸宅に掛ける扁額の揮毫を依頼している。本資料は、鉄斎が聖華房(京都の古書肆・山田茂助)に宛てた書簡等。四高、王士禛「帯蘇詩話」や陸蘭「放翁詩話」などの取り寄りを依頼しており、鉄斎の中国詩話への関心が窺われる。

30 魯道人重定詩文調格

呉昌碩 紙五九×横三二

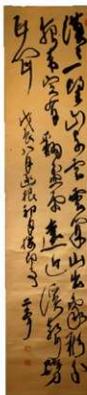
一九〇〇年 大妻友子今西書画

呉昌碩が、魯道人(張子封)のために定めた詩文調格(価格)。呉昌碩の詩文調格は細少。魯道人重定詩文調格。絶句二元、律詩四元、排律は毎韻(二句毎)五角、行風六元、長篇は韻脚、寿序十六元、別注は四八元、楹聯二元、長聯は壽言追加、頌詞、祭文十二元(確定)、神文は別注に相増、調書料は別注、指定日に取りに来られし、連絡所、上掲の各書肆(調書料店、庚申(一九〇〇)三月、呉昌碩七十七歳)。

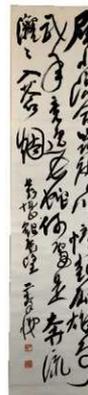
2 松雨浩懐情山深人高果 鳥啼 花淡暮暮 尔若甘 庚申(一九〇〇)年 吳昌碩



3 横一雙のり古雲家山出成 柳石 庚申(一九〇〇)年 吳昌碩



4 屏小臥空流 川陰 影如 我子 主 遠 志 仙 骨 是 奔 流 胸 中 一 箇 魯 道人 吳昌碩 庚申(一九〇〇)年



5 竹石 庚申(一九〇〇)年 吳昌碩



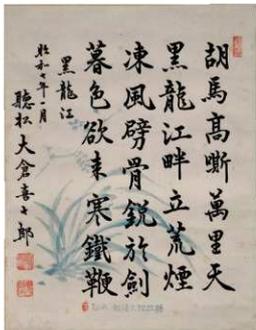
1 薜蘿披過人影 山嵐遠在石頭 秋色江南 如此 幾時 歸去 湖州 題畫詩 吳昌碩 庚申(一九〇〇)年



7 雨寒松閣 恣高 取夢入 會庭 陽紫 煙七十二 峯多 送 郭 聽泉 別 記 吳昌碩 庚申(一九〇〇)年



10 吳昌碩 庚申(一九〇〇)年



9 胡馬高嘶 萬里天 黑龍江畔 立荒煙 凍風劈骨 銳於劍 暮色欲來 寒鐵鞭 黑龍江 庚申(一九〇〇)年 吳昌碩



20-1



18



16



13



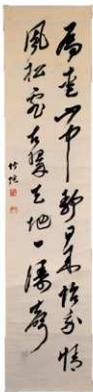
6



11



8



20-2



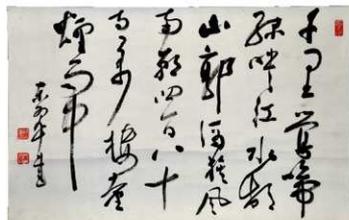
19



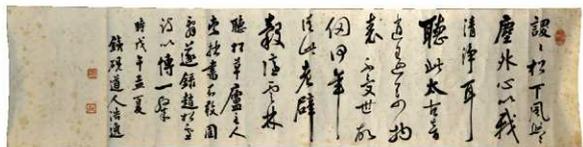
17



14



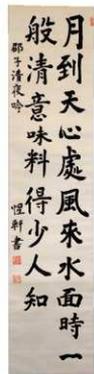
12



23



27



25



21



15



29-5



29-3



29-1



28



26



22



24



29-6



29-4



29-2

